
慈 恵



令和 3 年 No.76

秋



宗教法人 慈 恵 院

付属 多摩犬猫霊園

鑑賞



徒くく登と
飛とり見左久く
おほそらに
楚ひえ弓高し
富士の神山

泥舟

高橋 泥舟でいしゅう

幕末の幕臣。槍術に秀で、国事に通じ、講武所教授となり、一八六三年（文久三）新徴組を統率。鳥羽伏見の戦後、恭順謹慎説を主張。江戸城明渡し後は徳川慶喜を護衛。山岡鉄舟・勝海舟と共に幕末三舟と称。（一八三五—一九〇三）

「泥舟先生涅槃香」より

金剛には金剛の病

覚芝和尚は、近江馬淵庄にある巖蔵山福寿寺の一世である。当時、黄檗宗でうわさ高い人であった。

ひところ本山幹事の職を勤めていたが、病気で引退することになった時、ある僧が、

「和尚は金剛のような頑健であられるのに、どんな病気でござるか」

とたずねると、和尚は、

「金剛には金剛の病があるわい」と答えた。

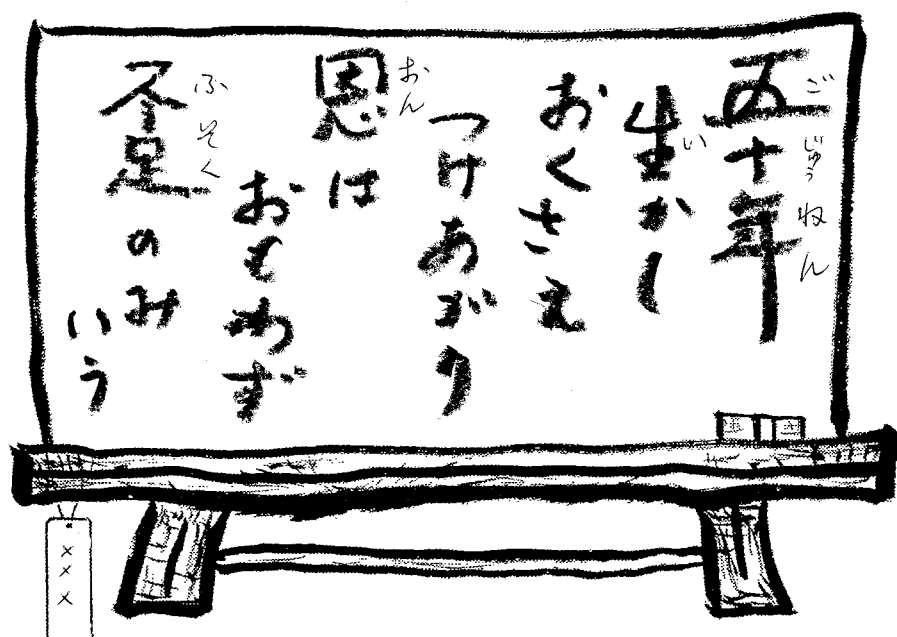
「禅門逸話集成」より

覚芝かくしこうほん広本

黄檗宗。

(一六八六〜一七四六)

揭示板





我が家の一大イベント

多摩市 若井 三奈 (40)

築年数もたち、すっかり傷んできた我が家を建て替えるという大イベントがありました。その時に問題だったのが当時飼っていた犬の与一です。男の子だったので雄々しく与一と命名しましたが、ずっと家の中で家族として接してこなかったためか内弁慶で人見知りな子になってしまいました。その上、13歳と年もいつていたので2回の引っ越しと初めて訪れる場所での半年間の仮住まいに与一が馴染めるのか甚だ心

配でした。大事な家族なのでもちろんどこかに置いて行くことも出来ず、引っ越し当日は家族が交代で付き添いながらその日を終えました。その日は私達家族も疲労困憊でしたが、与一もずっと緊張し通しだったため疲労を隠せず、伸びきってしまいました。

仮住まい先では引っ越し当初こそ落ち着かず、家中ウロウロ彷徨っていましたが、2、3日もするとすっかり寛いだ様子になりました。その時借りた仮住まい先が年季こそ入っていました。13歳と高齢犬と呼ばれる年齢に差しかかった与一には階段の昇り降りがないという家は快適だったのかもしれない。13歳という年の割に散歩中は

浣漑としており、走り回ることも多かったので意識していませんでしたが、横になって眠っている時間が増え、確実に与一の老いを実感させられました。階段の昇り降りもなく、家族全員が同じフロアにいるという間取りをとて

引っ越し当初とはまた別の意味で家族全員の部屋をウロウロと渡り歩いていました。私達家族にとってもすぐに与一の顔が見られるのは嬉しいことでした。ただ、フローリングの床が踏ん張りのきかない滑りやすい素材であったのには与一も閉口していたようで、ベッドやソファから飛び降りるのにいつも二の足を踏んでいました。私達家族にとっても与一にとっても不満のない仮住まいでの

生活でしたが、やはり新しい家を待ち遠しく思っておりました。

2回目の引っ越しでも家族が交代で与一に付き添い、落ち着かないながらもパニックを起こすことなく終えることができました。新居ではフローリングの床で滑ることはありませんが、2階に上がるのを苦にするようになり、降ることが辛うじてできますが昇ることができなくなり、2階に行きたそうなり、与一を見たら家族の誰かが抱っこして上がるようになり、本心に年を取ったんだと切ない思いをしました。それでも16歳と大往生と言っていいくらいの年齢まで頑張ってくれました。新しい家でも与一の思い出を作ることができました。



おかげさまで
順調に進んで
おります

新本堂建設進捗状況(Ⅲ)



11 月	10 月	9 月	当山行事
● 11/7 立冬 りっとう ものばかり (荒谷利夫) ● 11/22 小雪 しょうせう 千枚漬 (長谷川かな女)	● 10/8 寒露 かんろう 暦はや 寒露の蘭の 花の濃し (三田青里) ● 10/23 霜降 そうこう 霜降の 陶ものつくる 翁かな (飯田蛇笏)	9/26 明け (秋分の旦) 9/23 中日 (秋分の旦) 9/20 入り ● 9/7 白露 はくろ 黍の葉のうらがれを見る 白露かな (隈水) ● 9/23 秋分 しゅうぶん 秋分の 時どり雨や 荳のしづく (飯田蛇笏)	彼岸会
11/3 文化の日 11/15 七五三の祝い 11/23 勤労感謝の日	10/18 十三夜 (後の月)	9/9 重陽の節句 (菊の節句) 9/20 敬老の日 9/21 十五夜 (中秋の名月)	祝日等

「こよみ事典」東京美術 参考

秋こよみ

偶感

ゆげどうぶつクリニック(東久留米市)

院長 弓削 雄宏

近年、ペットの存在というものは家族同然という事が当たり前の時代になって参りました。

飼い主様の中には、自分の子供よりかわいとおっしゃる方もいらつしゃいますが、あなたが冗談ではないのかもしれない。

ペットとは、人が介入しないと生きていけない存在であり、これは寿命が尽きるまでお世話をする事になります。ある獣医心理学のセミナーでのお話ですが、『ペットとは寿命の短い永遠の2歳児と同じです』と例えられておりました。とても

うまい表現だと思い引用させて頂きました。ペットを飼育することで避けられないものがペットの死です。

家族同然の強い存在であるペットの死というものは飼い主様にとって影響が大きく、俗にいう“ペットロス”という状態になりやすいのとです。

ペットが亡くなる理由は様々で、突然の病気もそうですが、老衰など、必ず訪れるものです。

そこで大事なのは最後までペットのために何をしてあげられたか、という事がペットロスを軽減

する材料になるそうです。専門病院へ通院し最後まで病気と闘い、やれることはすべてやり切ったという事も大事です。また一方で、動物病院には無理していかずに最後までそばについて撫でてあげられた、という事もペットたちに与えては心穏やかに過ごすという観点ではとても大事なことです。

どちらの選択も両極端ですが、どちらの選択も正しいと思います。飼い主様それぞれ倫理観が違います。飼い主様それぞれがじっくり熟慮したうえで、病気で苦しむペットと向き合い、飼い主様自身がやり切れたと思えるように最期を迎えられることがとても大事ではないでしょうか。

ペットロスにおいて、獣医師ができることは限られておりますが、それでも飼い主様のペットロ

スを少しでも和らげる事ができるように一獣医師として飼い主様に寄り添えるように日々の診療に取り組みたいと思います。

話は変わりますが、私が獣医になったばかりの1年目のことです。当時の自分の不甲斐なさ、悶々としておりましたが、腎不全の治療を担当させて頂いた飼い主様がお礼の手紙を下されたことがありました。内容はお礼のメッセージでしたが獣医師として行き詰っていた当時の自分には、獣医師の仕事の本当の意味を教えてくださったとても貴重なお手紙でした。その教えを胸に初心を忘れず今現在も日々の診療に邁進しております。

長文となりましたが、一文が皆様への一助となれば幸いです。